

# ハバククの祈り

井田 泉

- 1 ハバククの嘆き
- 2 ハバククの沈黙
- 3 ハバククの賛美

## 1 ハバククの嘆き

皆さん、こんにちは。日本聖公会奈良基督教会の牧師、司祭の井田泉と申します。

今日から3回、旧約聖書の「ハバクク書」という小さな預言の書から、ハバククの祈りに触れてみることにしましょう。用いる聖書は「新共同訳」聖書です。

1 回目は「ハバククの嘆き」、2 回目は「ハバククの沈黙」、3 回目は「ハバククの賛美」です。

さて「ハバクク書」は、旧約聖書の終わりのほうに収められている十二の小さな預言書、十二小預言書と呼ばれるもののひとつです。全体はわずか3章です。その最後の3章の冒頭に「預言者ハバククの祈り」と記されています。

「預言者ハバクク」。彼は紀元前7世紀、イエスさまよりも600年くらい前に、ユダの国で活動した人です。

預言者は神さまから言葉を受けて、それを人びとに伝える人です。けれどもただ「神から人へ」という一方通行ではありません。預言者は神からの言葉を受けて伝えるばかりではなく、人の声、人の思いを神に届けます。「神から人へ」と「人から神へ」と——この両方の間に立つのです。ここに預言者の栄光と苦しみがあります。

ことにハバククはその時代の苦しみの中で、神に向かって嘆きの声を上げました。第1章冒頭からそれは非常に顕著です。読んでみましょう。

- 「2 主よ、わたしが助けを求めて叫んでいるのに  
いつまで、あなたは聞いてくださらないのか。  
わたしが、あなたに『不法』と訴えているのに  
あなたは助けてくださらない。  
3 どうして、あなたはわたしに災いを見させ

労苦に目を留めさせられるのか。  
暴虐と不法がわたしの前にあり  
争いが起こり、いさかいが持ち上がっている。  
4 律法は無力となり  
正義はいつまでも示されない。  
神に逆らう者が正しい人を取り囲む。  
たとえ、正義が示されても曲げられてしまう。」

ハバククはこのように自分たちの抱える現実の中に苦しんで、神に嘆き訴えました。神は彼に答えられるのですが、なお彼の嘆きは止みません。

**「1:12 主よ、あなたは永遠の昔から  
わが神、わが聖なる方ではありませんか。……**

**13 あなたの目は悪を見るにはあまりに清い。**

人の労苦に目を留めながら  
捨てて置かれることはない。  
それなのになぜ、欺く者に目を留めながら  
黙っておられるのですか  
神に逆らう者が、自分より正しい者を  
呑み込んでいるのに。」

このように嘆き祈っていたハバククはやがて、本気で神さまの言葉を聞こうとしました。彼はこう言います。

**「2:1 わたしは歩哨の部署につき  
砦の上に立って見張り  
神がわたしに何を語り  
わたしの訴えに何と答えられるかを見よう。」**

嘆くだけではなく、神が何を語られるか、訴えに何と答えられるかを知ろう、見ようとするのです。

するとやがて神の声が聞こえ始めました。

「2:2 主はわたしに答えて、言われた。

『幻を書き記せ。

走りながらでも読めるように

板の上にはっきりと記せ。

3 定められた時のために

もうひとつの幻があるからだ。

それは終わりの時に向かって急ぐ。

人を欺くことはない。

たとえ、遅くなっても、待っておれ。

それは必ず来る、遅れることはない。

4 見よ、高慢な者を。

彼の心は正しくありえない。

しかし、神に従う人は信仰によって生きる。』

神の幻、神の救いの幻がハバククに示されます。神が必ず行動されるそのビジョンが与えられます。

「たとえ、遅くなっても、待っておれ。

それは必ず来る、遅れることはない。」

それは漠然としたものではなく、明確なもの。神はハバククに、その幻、神の行動のビジョンを、走りながらでも読めるように、板の上にはっきりと記せ、と命じられます。人にもそれを示し、自分もそれを見失わないように。

ここでわたしたちはハバククから学びたいものがあります。それは、彼ハバククが、世の中の現実の不義、不正、暴虐を自分の痛みとして神に嘆き訴えた切実さです。そしてさらにもう一つは、彼の訴えに対する神の答を真剣に聞こうとした姿勢です。神さまはそれを無視せず、やがて答えられました。そして忍耐し、信じて待つことを求められました。

わたしたちも自分とその周りの平安を求めるだけでなく、この社会の不正、人々の強いられている苦しみに心を痛め、真剣に祈る者になりたいと願います。神は必ずそれに答えてくださるのです。

## 2 ハバククの沈黙

前回はハバククの嘆きの祈りの声を聞きました。また彼が嘆きの中で、真剣に神の答を知ろうとしたことを知りました。そして神はそれを無視されませんでした。

神の答えに頼り、神の示された幻を見つめつつ、なおハバククは世の悪を指摘し、訴えつづけます。第2章から聞いてみましょう。

「2:5 確かに富は人を欺く。

高ぶる者は目指すところに達しない。

彼は陰府<sup>よみ</sup>のように喉を広げ

死のように飽くことがない。」

「9 災いだ、自分の家に災いを招くまで

不当な利益をむさぼり

災いの手から逃れるために

高い所に巢を構える者よ。」

「12 災いだ、流血によって都を築き

不正によって町を建てる者よ。」

預言者の使命の一つは、悪を悪として指摘することです。悪しきに力によって虐げられ、声を上げることもできない人に代わって声を上げることです。このゆえに預言者は力ある者に憎まれ、迫害を受けることとなります。

しかしハバククはやがて沈黙します。神に向かって訴えたハバククは、今は神の前に静まって、神が何と言われるかをあらためて聞こうと願うのです。2章の初めでもそうだったのですが、2章の終わりに至って、あらためて彼はこう言います。

「2:20 しかし、主はその聖なる神殿におられる。

全地よ、御前に沈黙せよ。」

ハバククは神殿に入って神の前に身を置き、沈黙します。神が、生きておられる神がここにおられる。その前に沈黙するのです。自分自身が神の前に沈黙すると同時に、人々が、世界が、全地が神の前に沈黙して祈ることを呼びかけます。

祈りの中で、彼は神の幻を示されていました。神の言葉と幻がなければ、疲れて力を失っ

てしまうほかはありません。

**「2:14 水が海を覆うように**

**大地は主の栄光の知識で満たされる。」**

現実の世界がいかに不正と悪に満ちていようと、やがて時が来る。

「**大地は主の栄光の知識で満たされる**」その美しい光景を彼はありありと見ていました。その幻、ビジョンを示されたがゆえに、彼は絶望せずに活動を続けることができるのです。

日本聖公会は、かつて文語の祈祷書を用いていました。その中の「晩禱序式」（夕の礼拝の始まり）というのがあり、その冒頭に言葉が記されていました。

**「主はその聖なる宮にましませり、全地その御前に黙すべし」**

ハバクク書第2章20節の言葉です。この言葉が唱えられるとき、不思議な静けさが呼び起こされます。

**「しかし、主はその聖なる神殿におられる。**

**全地よ、御前に沈黙せよ。」**

神の声を聞くことを願うならば、神の前に静まること、沈黙することを学ばなければなりません。

わたしはしばらく前、聖書日課を讀んでいてこんな言葉に出会いました。

**「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。」イザヤ 56:7**

わたしたちの教会も、この礼拝堂もこうでありたい。ここは神の家、祈りの家です。たくさんの方がここを訪れてくださることを感謝します。しかしここで何に触れてほしいか。何をここで経験してほしいか。祈りの家であることを経験してほしいのです。

祈りと沈黙。そこで神の声を聞く。そのようにしてわたしたちが成長し、また礼拝堂が成長します。わたしたちの祈りが礼拝堂を成長させ、礼拝堂がわたしたちを育みます。

わたしたちもまた、神さまの前に沈黙すること、静かになることを学びたいと願います。そこから神さまの慰めと励ましと導きの声が聞こえ始めるに違いありません。

### 3 ハバククの賛美

神の前に世の中の不正を嘆き訴えていたハバククは、神殿に行き、神の前に沈黙して祈っていました。

どれくらいの時が過ぎたでしょうか。やがて歌声が聞こえはじめました。ハバククが再び声を上げて祈り始めたのです。彼の祈りは歌となって響いてきます。なぜそれがわかるかというと、3章の初めに「シグヨノトの調べに合わせて」(3:1)と書かれているからです。彼の祈りは歌となっていたのです。

「3:2 主よ、あなたの名声をわたしは聞きました。

主よ、わたしはあなたの御業に畏れを抱きます。

数年のうちにも、それを生き返らせ

数年のうちにも、それを示してください。

怒りのうちにも、憐れみを忘れないでください。……」

これは歌です。祈りの深まりと高まりは歌となり、音楽となったのでした。

「シグヨノト」とは何か。はっきりしたことはわかりませんが、「変化のある情熱的な調べ」とも言われ、「嘆きの調べ」とも言われます。ルターはここをドイツ語で <sup>クラーゲンリート</sup> **Klagenlied** (嘆きの歌) と訳しました。

韓国の昔の映画をテレビで見たことがあります。遺体を葬るため墓地に運んでいく。野辺送りの道で行列する人びとが「アイゴー アイゴー アイゴー アイゴー」と歌うように嘆く声が続いていました。祈りが歌となるのです。

「シグヨノトの調べ」というのがどのようなものであったかは、今となってはわかりませんが、彼が歌いつつ祈っている言葉を、もう一度聞きましょう。

「主よ、あなたの名声をわたしは聞きました。

主よ、わたしはあなたの御業に畏れを抱きます。

数年のうちにも、それを生き返らせ

数年のうちにも、それを示してください。

怒りのうちにも、憐れみを忘れないでください。」

「数年のうちにも」 数年のうちにも、神さまがみ業を現してほしい。

わたしたちにとっての数年はどうでしょうか。

今すぐに聞いてほしい祈りがあります。反対にいつか将来神さまにかなえてほしい願いがあります。

しかしこの数年のうちにも、神さまに訴えて聞いてほしい祈りはないでしょうか。数年の後わたしはどうなっているのか。家族は、教会は、世の中は……

「数年のうちにも、それを生き返らせ、数年のうちにも、それを示してください。」

「それ」とは神の御業です。まるで今は神の業が死んだように停止していると思える。神が生きて働いておられるのを見ることができない。けれども数年のうちに、神さまが生きておられることを示し、その御業をわたしたちに現してほしいのです。

「数年のうちにも、それを生き返らせ、数年のうちにも、それを示してください。」

さてこの祈りの歌を聞いている間に、ただ独りハバククが祈り歌っているのではないことに気づきます。楽器の伴奏が聞こえます。ハバクク書の終わりをみると

「3:19 指揮者によって、伴奏付き」

と結ばれています。

ハバククにおいて祈りは歌となりました。礼拝において音楽は力を与えます。歌によって力を与えられ、共に祈る人々の伴奏によって支えられたハバククの祈りは、嘆きでは終わりません。神が何かをなさる。それを、祈る人は神の幻、ビジョンを見つめます。

「3:3 神はテマンから

聖なる方はパランの山から来られる。

その威厳は天を覆い

威光は地に満ちる。」

テマンは南のほうの乾燥地帯、パランも南方の荒野です。神は荒野から来られる。信仰の

民イスラエルの先祖は、かつて荒野で神との出会いを経験しました。わたしたちも荒野で、困難の中で神を経験するのです。

「3:6 主は立って、大地を測り  
見渡して、国々を駆り立てられる。  
とこしえの山々は砕かれ  
永遠の丘は沈む。

しかし、主の道は永遠に変わらない。」

神は立ち上がられます。立ち上がって行動しようとする神の姿が見えます。永遠に動かないと見えた地上の支配は砕かれ、不動のものと思えた悪しき力の基盤は沈んでゆきます。永遠なのは主の道、とこしえに続くのは神の統治です。

今は状態は厳しく、希望の確かなしるしは見えていなくても、歌と音楽によって励まされた信仰は、やがておいでになる主とその救いを見て喜びます。

「3:18 しかし、わたしは主によって喜び  
わが救いの神のゆえに踊る。  
19 わたしの主なる神は、わが力」

どうかこのことを、主なる神さまがわたしたちにも経験させてくださいますように。

祈ります。

主よ、数年のうちにも、あなたの救いの業をわたしたちに現してください。たとえ今、わたしたちがどのような課題、困難を抱えているとしても、あなたの救いを見て喜ぶ者にしてください。わたしたちの祈りが歌となるようにしてください。あなたの良きみ業を、希望をもって仰がせてください。主の御名によってお願いいたします。アーメン

(CGNTV 奈良基督教会礼拝堂にて収録 2018/02/23)